

## 2024年12月1日降臨節第1主日説教

エレミヤ書 33章14-16節

テサロニケの信徒への手紙一 3章9-13節

ルカによる福音書 21章25-31節

降臨節第一主日、教会暦が新しくなりました。また、本日から聖餐式聖書日課は、新しい祈禱書の試用版のものを用います。旧約日課が、ゼカリヤ書からエレミヤ書に変わり、詩編は、第82篇から第25篇となり、その詩篇も新しい翻訳です。新しい祈禱書の完成がもうすぐです。新しい一年の始まりとして、アドベント・キャンドルの一本目が点灯されました。一本目のろうそくの意味は、「希望」だと言われています（諸説ありますが）。旧約日課のエレミヤ書も「希望」を語っていますが、その「希望」は国家的混乱の中で見いだされる「希望」です。

本日は新しく日課となったエレミヤ書を中心に学びますが、エレミヤ書は三大預言書の一つです（イザヤ、エレミヤ、エゼキエル）。イスラエル・ユダ王国の滅亡、バビロン捕囚前後の事柄を中心的題材とした預言書です。32章から33章は、まさにその最中の事柄を示しています（ただし、その最中に書かれたかどうかは別です）。またエレミヤ書は、首都エルサレムに集中して語ることも特徴です。本日の個所でも「その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに暮らす。この都は『主は我らの義』と呼ばれる」と、エルサレムが、救いのしるしとなっています。

本日の日課は33章14節から16節ですが、32章1節から2節は「ユダの王ゼデキヤの治世第十年、ネブカドレツアルの治世第十八年に、主からエレミヤに臨んだ言葉。その時、バビロンの王の軍隊がエルサレムを包囲していた。預言者エレミヤは、ユダの王の宮殿にある監視の庭に拘留されていた」と始まります。王国の首都は、外国の軍に包囲されているのです。そして、預言者エレミヤは、王国の滅亡を預言したので、拘留されていたのです。しかし、エレミヤは単に滅ぶと語ったのではありませんでした。31章ですでに「新しい契約」について語っており、王国の滅亡とバビロン捕囚という国家的悲劇の後に来る、希望を語ったのです。また、単に言葉だけで希望を語ったのではありません。そのしるしとして、一つの行動を示します。その行動について記しているのが前の章の32章にある有名な「アナトトのぶどう園」のお話です。

「アナトトのぶどう園」のお話とは、預言者エレミヤが、父方のおじシャルムの子ハナムエルからアナトト（ベニヤミン族の土地、エルサレムの近辺）というところにある「ぶどう園」を買い取ることです（エレ32章）。ハナムエルは、経済的事情から自分の土地を売ってしまったようです。しかし、イスラエルの土地は、主なる神様が与えた土地ですから売買されても戻すことが大切です。預言者エレミヤは、その通りに親族として買い戻すこととしたのです。そして、その証書を王宮の人々に示すことを通して、「希望」に関する預言をしたのでした。なぜ希望を示すのか、王国がバビロニア帝国によって滅ぼされようとしているときに、土地を買い戻すからです。王国の滅亡時ですから、土地に関する権利も消滅する、人間的にはそう考えてしまいます。しかし、エレミヤは、土地を買い戻す行為を通して、主なる神様の王国であるイスラエルに「希望」があることを示すのでした。

本日の個所がある33章は、それらの出来事を受けて続く箇所ですが、1節は、「主の言葉が再びエレミヤに臨んだ。この時彼は、まだ監視の庭に閉じ込められていた。」と始まります。そして、「壘と剣とで破壊されるこの都の家々とユダの王たちの宮殿に

ついて、イスラエルの神、主はこう言われる。彼らはカルデア人と戦おうとして出て行き、都は死体で溢れるであろう。私が怒りと憤りをもって彼らを打ち殺し、そのあらゆる悪のゆえに、この都から顔を隠したからだ。」(エレミヤ 32:4-5) と、これから起こるイスラエル・ユダ王国の首都エルサレムの悲劇は、主なる神様の怒りであり、その惨状が書かれています。しかし、9節では「この都は地上のすべての国民にとって喜ばしい名声、賛美、誉れとなる。彼らは、私が行うあらゆる恵みの業について聞き、この都に私が与えるあらゆる恵みとあらゆる平和のために、恐れおののく」と希望を語ります。また続く10節では「主はこう言われる。あなたがたが、『ここは廃墟で人も獣もない』と言っているこの場所に、荒れ果てて、人も住民も獣もないユダの各地の町やエルサレムの巷に、再び声が聞こえるようになる」とあります。人間的な思いからすれば、「廃墟」となったり、「人や獣」も住めないような場所になったりする前に、何とかならなかったのかと思えますが、主なる神様は、預言者エレミヤを通して、混乱と破壊のあとに、希望があることを語るのです。

これらを受けて、本日の個所です。「その日が来る——主の仰せ。私は、イスラエルの家とユダの家に語った恵みの約束を果たす。その日、その時、私はダビデのために正義の若枝を出させる。彼は公正と正義をこの地に行く。その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに暮らす。この都は『主は我らの義』と呼ばれる。」

エレミヤ書が示す、王国の滅亡を通じた希望が示すことは、今日も世界中に混乱と戦いがあるわたしたちにとっても大切です。今起きてしまっている戦いや混乱をどのように解決するのかを考えた時、エレミヤ書は大切なヒントを与えていると思うからです。もちろん、破壊と滅亡が起こる前に、平和が訪れるならば何よりです。しかし、人間的な思いにとどまる時、解決を見出すことはなかなか困難です。今生きている争いの原因や理由を考えると、そこには様々な人間的な思いがあり、それぞれが考える平和のために戦いが起きているとも言えるからです。あるいは特定の歴史を学び、そこからのみ考えてしまうからこそ、戦いが起こると言えるからです。言い換えれば、自己が見出す真理、その真理は一つだと考えるから、その真理の違いによって戦いが起きるともいえます。エレミヤ書が示すことは、主なる神様の意思は、それら人間的な事柄をすべて超えているということです。それは主なる神様がこの世界を作られた方であるからです。だから、人間による破壊の悲劇が起きてしまっても、希望があるのです。

本日の福音書は、小黙示録ともいべき箇所です。「そして、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂う中で、諸国の民は恐れおののく。人々は、これから世界に起こることを予感し、恐怖のあまり気を失うだろう。天の諸力が揺り動かされるからである。」(ルカ 21:25-26) とありますので、戦争や争いではなく、自然災害のような事柄について語っています。しかし、そこにも主なる神様が関わり、その先に希望があることを示します。そんなことが起こらないようにと願いますが、それが起きてしまっても、希望は無くならないことが示されています。「人の子が力と大いなる栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る」からです。この「人の子」とはイエス様です。そして、その「人の子」であるイエス様の誕生を祝うクリスマスを迎える準備に入ります。すでに昨日クリスマスの飾りを完了してくださっています。また、昨日は聖愛教会で山手グループの降臨節前の光の礼拝も行われました。今年もより多くの方々と共に、平和のうちに主のご降誕を迎えることができるように、しっかりと準備をしたいと思えます。